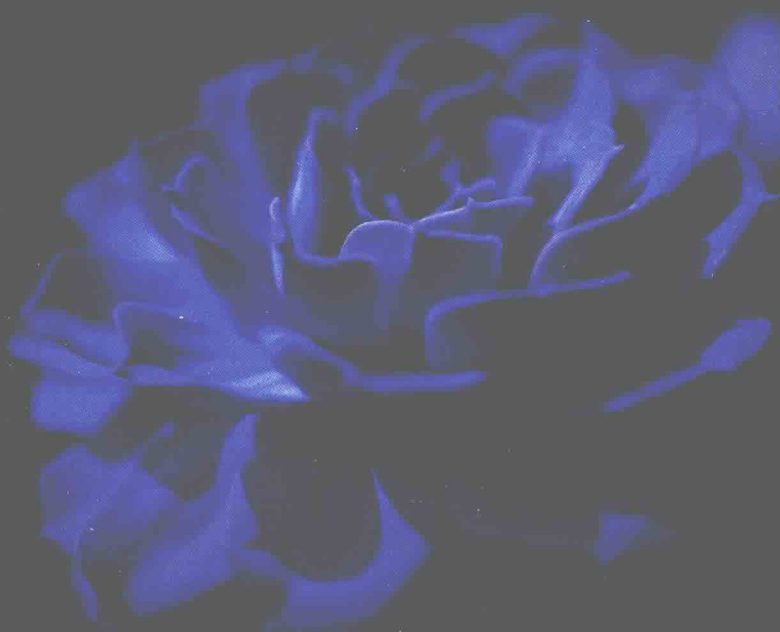


平野啓一郎

いちげつもの がたり
一月物語



新潮社

一月 いちげつ

物語 ものがたり

藏平

野啓一郎

江苏工业学院图书馆
藏书章

新潮社

著者略歴

1975年、愛知県生まれ。福岡県立東筑高校卒業。京都大学法学部卒業。1999年、大学在学中に文芸誌「新潮」に投稿した第一小説『日蝕』で第120回芥川賞を受賞。



いちげつものがたり

一月物語

著者………^{ひらの けいいちろう}平野啓一郎

発行………1999年4月15日

発行者………佐藤隆信

発行所………株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話 編集部(03)3266-5411

読者係(03)3266-5111

振替 00140-5-808

印刷所………大日本印刷株式会社

製本所………加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Keiichiro Hirano 1999, Printed in Japan

ISBN4-10-426002-9 C0093

¥1300

一^{いち}
月^{げつ}
物^{もの}
語^{がたり}

装幀 装画
新潮社装幀室 石川賢治

ひら／＼と舞ひ行くは、
夢とまことの中間^{なかば}なり。

——透谷

明治三十年初夏の或る夕刻のことである。

奈良県は十津川村の往仙岳山中に、孤り立ち尽す青年の姿があつた。白薩摩に小倉の袴、流石に高下駄は草鞋に穿き替えているが、短くさっぱりと刈られた頭と云い、少しく憔悴した面持と云い、宛ら東京の三田辺りでもふらついていそうな、当り前の書生風である。如何にもそれが、まわりの景色と似つかわしくない。

容は頗る美しい。が、その深い眼窩には、赭みがかった銅版に、鋭利な針で幾重にも線を刻んだような翳が差している。瞬きは素早く、瞼は必ず二三度続け様に往復する。懼

らくは、開化以前には終ぞ見られなかつたであろう、舶来の所謂黒胆汁質の表情である。これもまた、ここにあっては殊に際立つて異様である。

山の斜面を鬱勃と覆つた水楡の林は、逢魔が時の緋色を吸つて蜜に浸つた蜂の巢のように膨らんでいる。落霞は遠く、木洩れ日は僅かに。――

顧て、初めてこれに気づいた青年は、呆然とその場に足を止めた。

「俺は一体、どこに迷い込んでしまつたのだらう？」

夕影鳥の啼き声が、一斉に穹に昇つた。……

青年の名は井原貞拆と云う。齡は数えて二十五である。

熊野の本宮へ詣でる為に、橋本より発して小辺路を歩くこと、既にして二日であつた。難所を以て知られる伯母子峠から五百瀬に至る路では、例によつて、途中旅籠の上西で一夜の宿をとつた。真拆はここで、道中劇しく傷んだ草鞋に替えて、新しいものを二足買った。そして、明けて今日、仔細あつて少し遅くに宿を出てからは、案の外旅程も順調であり、遅々たる歩みながらも、五百瀬を越え、三浦に這入つて、日昃の頃には漸くその峠に

差し掛かろうとしていた。

十代の頃から、屢々世に謂う神経衰弱に悩まされていた真拆は、旅をしてその氣鬱を慰めることを常としていた。これは抑々渠の怙恃の勧めに従つて始めたことである。先ず父が案を出し、次いで母が賛同した。真拆は、最初の旅でその効能を知った。そして、以後は自ら進んでこの妙薬を服するようになった。

行き先は大抵決まつてはいない。氣の赴くままに列車に乗り、飽きれば降りてその地を觀てまわる。或いは町並を眺める。或いは旧跡を訪ねる。時には、人も通わぬ名勝を巡る。そんな調子であるから、思いがけず、長い距離を歩くこともある。しかし、そのことが不快と感ぜられることはなかった。肉体が直接に外界から被る疲労が、真拆には却つて快かつた。それは、一度内なる金属片のような共鳴器に触れてから、間接に得られる疲労とは、固より異質のものである。旅の垢も宛らに、旅籠で一風呂浴びれば忽ち落ちて流れてしまふような、爽やかな疲労。夕餉と俱に消化されてしまふような疲労。出立の朝には、床の上にうっかり置き忘れてしまふような疲労。——そう云う類の疲労であつた。

数日前、真拆は驟然と、またこの疲労が恋しくなった。そして、大学で幾人かの友人に金を借りると、寄宿している叔父の家に戻って断りを云い、そこでまた金を借りて、殆ど何の用意もなく、着の身着のまままで新橋の駅へと向かったのである。――

真拆が今、こんな山奥を彷徨っていることには幾つかの奇縁がある。それらは皆、本を正せば、ここに端を発しているのである。

闇雲に直走り漸く駅に着くと、真拆は入口に立ち止まって、須臾の間思案した。

「足が向くの任せて、兎に角、ここまで来た。――さて、この先どちらへ征くべきか。

……迷わず西へ征こうか。それとも、上野まで出て、東へ征こうか。」

前の旅では、芭蕉の足跡を訪ねて、松島にまで赴いた。されば、今度は反対に西を目指すべきであろうか。しかし、胸裡に蘇った松島の絶景を思うと、真拆は、また、同じ所へ征くのも悪くはないと云う気がした。

「上野か、……」

――独り言ちて、歩き出そうとしたその時、ゆくりなくも四五人の洋服の男女が前を横切った。

「……あら、桜が散ってしまっても、吉野は綺麗なところですよ。」

こう云って莞爾と打笑んだのは、日傘を傾け傍らの母親らしき者の顔を覗く、三十路手前の女であった。仏蘭西結びに朱い薔薇の簪を斜めに挿して、その上更に帽子まで被っている。髪の色は濃い。項は皙く、蓮の茎のようにほっそりとしている。開いた薄桃色の日傘が、またその花卉のよう。翻った帽子の丸い鍔は、鮮やかな雄蕊の輪のようであった。如何にも華族の令嬢らしい、豪奢な白い衣服をさりげなく奥ゆかし気に着こなして、雑踏の中にふと足を止めたその姿に、真拆は、以前に叔父の書齋で眼にした、モネの手になる女の絵を思い出した。

画集の女に劣らず、洋服がよく馴染んでいて嫌味がない。踵の高い靴も似合っている。それでいて、イマイはどこか古風である。頭の飾りと同様に、和洋の趣が微妙に解け合っていて、不思議な魅力となっている。

その女が、一瞬真拆を顧て、仔細らしい目つきで小顎を傾げた。薄い紅を引いた慎ましやかな唇が、微かに開いて、皓い歯を覗かせている。何かを語ろうとしているのか。真拆は覚えず女の眼を見た。しかし、詞は発せられない。ただ、僅かに力を込めた臉際が、も

う既に何かしらを語り了えてしまったかのように締まっている。

真拆は戸惑った。そして、躊躇^{ためら}いがちに、同じく眼を以て詞にならぬ何かを伝えた。意識の段にも上ることのない、本人にさえ分からぬ何かである。――が、女はこれに、仄かに満足気な笑みを湛えて、そのまま一言だに発することなく黙って顔を元へ戻した。ふたたび歩き始めると、今度は前に行く連合いの男に、打って変わって気軽に声を掛け、雑踏を抜け、改札を潜ると、何時しか歩廊^{フオム}の彼方へと消えてしまった。

真拆は呆然とその後ろ姿を見送った。

「吉野と云ったな、……」

独り言ちて切符売場に赴くと、そこで西へ向かう東海道線の切符を買った。

これが、一つ目の因縁であった。――

真拆はそれから、歩廊^{フオム}でもう一度見掛けたのを最後に、女と逢うことはなかった。固より渠^{かれ}等は上等客車の身分であり、真拆の方とは云えば、鮎^{アヲ}詰の下等客車で、戦後の好況もそろそろ危ないだとか、米の値段が上がりそうだとか云った話を聞きながら、席にも着けず立っていると云う態であったから、傍らにあってそのあとを追う如きは叶わぬことであ

った。しかし、縦い^{なと}叶うとしても、女はそれを望まなかったであろう。取り交わされた詞は、そう云った偷閑^{あかしさま}な遣方ではなく、もつと密やかに、もつと偶然に成就しなければならなかった。それ故に、殆ど何一つとして当てなどないにも拘らず、真拆は、吉野へ之^ゆけば、どこかでひょっくりと女と再会出来るかもしれないと云う曖昧な期待を抱いており、しかも、それを半ば本気で信じていた。

京都で一夜の宿をとり、翌日、七条の停車場から通ったばかりの奈良鉄道に乗って、木津を越え、奈良へと之^ゆき、そこから更に大阪鉄道に乗り換えて、王寺を経て高田にまで行った。

ここでまた宿をとった。

目前に迫った吉野が、真拆には懐かしく想われた。

実際に、そこを訪うたことは一度もなかった。しかし、少年の頃より愛読してきた『太平記』や『楠公三代記』等によって、想像裡には既に幾度^{いくたび}も彼地^{かの}を踏んでいる。今之^ゆこうとしている現実の吉野では、古の南朝は早く既に露と消えている。ただ、その幻のあとを尋ねて歩む、美しい女の姿が一つ、ちらりと……

こうした思いを抱いて、翌朝、南和鉄道に乗った真拆は、ほど経て、斜め向かいのひとりの老爺に気がついた。紺の着流しに、紫縮緬の角帯を巻き、脚半まふはんを着け、捲った裾からは骨と皮だけの腿が覗いている。腕は楊枝のように細い。が、存外頑健な躰つきである。

壮士と云うには、歳を取り過ぎている。顔は糖を吹いた乾柿ほしかきの如く、肉が落ち、浅黒く、疎らに白い無精髭が生えている。頭には未だいまに禿げともつかぬ月代さかやまが施されており、髪は耳の上に、申し訳程度に残るばかりである。

別段知り合いと云う訣ではない。ただ、不思議と顔馴染みのように思われるのは、昨日京都から、ずっと同じ列車に乗り合わせていたからである。それが、今日もまた、偶然同じ列車の同じ車両に乗っている。真拆は、思わずその面おもてを見遣った。すると、席を立って、向こうの方から声を掛けてきた。

これが二つ目の因縁であった。

「やっと、氣イつかりましたなア。」

当たり前のように傍らに腰を卸すと、老爺は、さも親し気に喋り始めた。

真拆は、こうした旅先での出逢いを喜ばなかった。出来れば一人で旅を続けたい。出逢

いがあるとするならば、それは飽くまで、渠自身の気の向く時に、気の向く場所で求められねばならなかった。さもなくば、得るべき旅の効能は半減してしまふからである。

真拆は咄嗟に少し嫌な顔をした。しかし、老爺に、それを氣遣うような様子は微塵もない。次々と話頭を転じては、時折自分の云った饒談じようだんにからからと呵わつてみせる。それが、風体と相須あひまつて、何となく不気味である。真拆は、親類うちの中に発狂した者があつて、幾度か渠を癲狂院に見舞つていたので、精神に異常を來した者が屢々無意味な乾いた呵わいを発するのをよく知っている。老爺の呵わい方は、要するに、そう云う類のものであつた。

詮方なく、もう暫く、葛くずまでの辛抱と、真拆は適当にこの男の話に相槌を打つていた。聞けば、終点の二見ふたみまで之ゆき、そこから歩いて高野街道に入り、小辺路を経て、熊野の本宮に参る積つだと云う。

「丁度、旅の道連れが出来て、あんたも安心やろ。何しろ、小辺路は寂しい道やさかいなア。」

老爺は、こうつけ加えた。言葉はどうやら河内辺りの方言であるらしい。

真拆は瞠目した。

『この薄気味悪い爺は、俺を熊野まで御供させようと云うか？——饒談じゃない。』

そこで、初めて真面に口を開いて、こう断った。

「僕は、申し訳ありませんが、熊野へ行く積はないのです。葛で降りるのでから。」

——これが、老爺にとつては、よほど愉快であつたらしい。また独り声高に呵うと、
「吉野は諦めなアレ。あんたはわしと熊野様に詣でるんじゃ。」

と云った。真拆は苛立ちを露にした。

「貴方が熊野へ行きたいと云うのなら、それは貴方の勝手だ。行けばよい。けれども、僕が吉野へ行くと云うのも、僕の勝手だ。貴方に色々云われる筋合はない。」

これを聞くと、老爺は今度も堪えきれぬと云う風に呵つてみせて、

「そない曰うても、もう葛は疾オに過ぎとる。次は二見じゃ。」

と云った。真拆は慌てて外を見た。景色からでは分らない。そこで、偶々前を通った車掌を呼び止めて、次の駅を慥かめてみた。

「ええ、あとは二見で終点です。」

愕いて、老爺の方を顧た。老爺はやはり薄らと笑みを湛えて、熟と真拆の顔を目守つて

いる。その様が、どこか化け物染みている。如何にも、人間など取るに足らぬと云った風である。列車は、時折劇しく揺れながら、猶しも走り続けている。車窓からは、幽かに風の這入る音がする。……

記憶を辿るほどに、真折の混乱は深まった。どう思い返してみても、葛に列車の止まった記憶がない。止まらなかつたのか。否、そんな筈はあるまい。それなら、気がつかなくなつたのか。しかし、抑^{おさ}葛ばかりではなく、外のどの停車場に就いても列車の止まつた記憶がない。恰も、高田から一飛^{ひつとび}にここまで来てしまつたかのようなのである。なるほど、時計を見ればそれなりの時間が経っている。されば、……

この時、車中に迷い込んだ一匹の鴉^{からす}揚^{あげ}葉^はが、二人の眼の前を優雅に掠めた。仄かに碧^{みどり}を帯びた金粉蒔地の左右の翅^{はね}に、奇異なる緋色の紋が一つずつ。頭には触角が一双、賢^{さとし}そうにピンと立っている。

老爺はこれを見ると、独り言ともつかぬ口調で、

「おやおや、お前もこんな所^{ところ}にまでお出迎えか？」

と語り掛けた。そして、颯^{さつ}と両腕を伸ばすと、掌^{たなこ}を合わせてこれを収めた。